

中国内モンゴル人青年の民族アイデンティティの諸相 ——出身民族への所属意識と行動面での表出をめぐって——

専攻 人間発達教育専攻
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M14009C
氏名 青平

【先行研究と問題意識】

先行研究によると少数民族の出身民族（マイノリティ）への所属意識が変化し、多様化されていることが報告されている。民族アイデンティティの多様性に関わる研究としては、権（2014）、金（2013）などの研究が挙げられる。しかし、内モンゴル人（モンゴル民族のみ）の民族アイデンティティの多様性の実態が明確にされていないという課題が残されている。また、民族アイデンティティがそのように多様化されている原因について探る必要があると考えた。民族アイデンティティの形成に関する先行研究は在日朝鮮人を対象にしたものを多く参考にした。その際に内モンゴル自治区の背景について検討し、民族アイデンティティをどのように扱えばいいのかという問題を踏まえて、本調査に取り込んだ。

【研究目的】

一、目的1

先行研究や漢民族の移民の転入、モンゴル民族伝統的な生活の崩壊、普通話（漢語）の推進など、内モンゴル自治区の社会的・文化的・言語的な側面には急激的な変化が進んでいる地域といった内モンゴル自治区の状況から、その地域に置かれているモンゴル人の青年のアイデンティティが多様であると予測される。それでは、実際、内モンゴルに住む青年はどのようなアイ

デンティティを抱いているのか。この実態を捉えることを第一の目的とする。

二、目的2

内モンゴル自治区で漢民族化が顕著であると見られる通遼の人に限定し、対象者の中から「自分をモンゴル人だと思う」人を抽出して、彼らの所属意識に重点を置きながら、彼らの行動面での表出の程度や頻度を多次元に捉え、成育歴や文化環境など（「成育家庭内の民族的伝統性」、「受けた民族教育の程度」など）を検討し、彼らの民族アイデンティティがどのように形成されているのかを考察したい。また、同じ民族アイデンティティを選択している人たちを比較し、それぞれの特徴や共通点を探り、その人たちの民族アイデンティティが生活の中でどのように生かされているか、あるいはモンゴルアイデンティティを持ちながらも生活の中にあまりに意識されていないか、その多様性を踏まえて検討したい。これを第二の目的とする。

【研究方法】

調査は、内モンゴルフフホト市で2015年9月11日から9月28日にかけて行った。各調査対象者に対して1時間から2時間程度のインタビューを行い、ICレコーダーで録音した。インタビューは、対象者たちの共通点や相違点を抽出できるように、質問項目を一貫して用いて、同時に対象者の回答に応じて追加の質問をしたり、意味を確認

したり、説明を求めたりすることができる半構造化インタビューの形式とした。質問項目を設定する際には、主にフィニーの「多民族アイデンティティ尺度」(MEIM 尺度, Multigroup Ethnic Identity Measure の略である, 1999) を参考にした。

【分析結果】

本調査では民族アイデンティティの多様性について考察する際に、28 人のインタビュー内容に基づいて、分析した。調査結果は以下の通りであった。対象者 28 人のうち、「モンゴル人」という回答を選択した人が圧倒的に多かった(21 人、75%)である。また、「中国人+モンゴル人」という回答を選択した人は 6 人(21.4%)です。そして、「どちらでもない」という回答を選択した人は 1 人だった。これ以外の回答を選択したものはなかった。

モンゴル人青年の民族アイデンティティの形成を検討する際に、通遼市の対象者に限定し、その中から「自分をモンゴル人だと思う」人だけを抽出し、分析を行った。通遼市出身の対象者(7 人)のインタビュー内容を KJ 法で図式化し、全体図を絵描き、またそれを説明する文章を作成した。そして、対照表を作り、各対象者の特徴をまとめ、その後、彼らの生い立ちの特徴を文章化した。

【総合考察】

調査結果に基づいて、以下のような考察することができた。

1. 内モンゴル人青年の民族アイデンティティの多様化されている実態を把握することができた。さらに、同じ回答を選択した者の間に比較し、彼らの特徴を「モン

ゴル人としての意識の強さ」、「ハーフの特徴」、「外モンゴルへ思い」、「統合されたアイデンティティ」という 4 つの視点からまとめることができた。

2. 先行研究と本研究の結果を比較し、民族アイデンティティの形成の過程で、家庭、学校、他民族の接触と差別という側面から影響は明らかであることが証明された。また、本調査を通して民族アイデンティティの形成の過程で、個人努力が重要であることをわかったことである。

3. 民族アイデンティティの表出については、言語、メディアの利用、友人関係、行動面での表出、職業・配偶者選択といった側面から考察した。

【今後の課題】

今回の調査では、各地域の対象者人数の割合が均等ではないという問題がある。例えば、通遼市と赤峰市出身の人が圧倒的に多かったが(通遼市 8 人、赤峰市 11 人)、フルンボイル市、フフホト市、オルドス市とアルシャー盟出身の人はそれぞれ一人しかいないことである。また、ウカイ市、ボクト市、ウランチャブ市出身の人を今回インタビューすることができなかった。そのため、今後はデータ収集が少なかった、あるいは完全にデータが収集できなかった地域の人に対して力を入れる必要があると考えられる。また、民族アイデンティティの形成、行動面での表出を考察する際に、通遼市出身の自分をモンゴル人だと思っている人のみを抽出した。そのため、他の地域に生まれ育った人たち、他の民族アイデンティティを選び取った対象者を分析する必要がある。

主任指導教員 中間 玲子
指導教員 中間 玲子